資料４－２－１

奥州市における子どもの居場所の取り組みについて

奥州市青少年育成市民会議 事務局次長 大村千恵

① 団体の概要

昭和 50 年に発足。全国的に青少年非行が懸念されていたことも背景にあり、健全育成の国民運動に呼応する形で結成された。平成４年、専任事務局員を配置し事業の充実・発展を期すこととなる。

② 子どもの居場所づくり事業の背景・経緯

・「子どもの社会参画」をベースにした青少年育成を心掛けた結果、中高生のジュニアリーダーが年々成長し、自主サークル『水沢ジュニアリーダーズクラブＪＵＭＰ』が誕生した。彼らの活動拠点があったら、いつでも自由に気軽に集い、よりクリエイティブな活動に取り組むことによって、更なる自主性や社会性が育っていくと考えた。

・平成 9 年から 10 年にかけて、神戸市須磨区の連続児童殺傷事件や長崎バスジャック事件が発生したことから、当時の文部省や厚生省が「子どもの居場所づくり」事業を推奨したことも着手への後押しとなる。

③ 事業の概要

・平成 11 年、旧消防署跡に「ホワイトキャンバス」開設。老朽化のため一昨年から奥州市勤労青少年ホームの一室を間借りして運営。

・平成 14 年、旧図書館を活用して「パステルハウス」開設。

・平成 16 年、常盤小学校多目的ホール内に「あそんでいいとも」を開設。

【大切にしている理念】子どもたちが心と体を開放し、ゆっくりくつろげる空間の提供。

④ 事業の効果

・特段プログラムを設けていないことから、子どもたちはそれぞれ思い思いに過ごしながら、遊びも人間関係も自ら作り出していく力が育まれている。

・間口を広く敷居を低くと心掛けた結果、不登校やひきこもりなど他者との関係づくりが苦手な子や、虐待や貧困・発達障がいなど困難を抱えている子どもたちの来所があり、早期発見による適切なアプローチにつながっている。

⑤ 今後の課題

・施設の老朽化により青少年ホームは廃止の方向であり、「ホワイトキャンバス」を継続して運営するための新たな施設の確保。

・成人になったかつての利用者が、社会になじめずに来所した際の対応。

⑥ これからの展望

「子どもたちがつくる小さな社会」を指針とし、世の中に出ていくための準備や訓練をする場の提供を今後も続けていきたい。“問題が起こった時が成長の時”ととらえ、子どもたちの可能性(自治能力)を信じ、黙すべき時と導くべき時を見極めながら、ともに課題を解決する大切なパートナーとして信頼関係を築いていきたい。